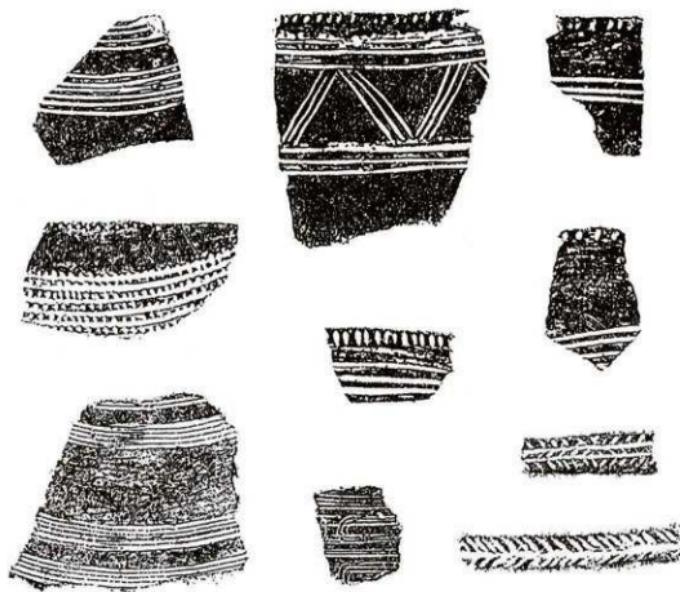


美園遺跡



1999・3

大阪府教育委員会

はしがき

八尾市美園町に所在する美園遺跡は1975年12月、大阪中央環状線敷地内のガス工事によって発見されました。その後、近畿自動車道天理・吹田線建設工事に先立って1980年から財団法人大阪文化財センター（当時）によって美園遺跡の発掘調査が数ヶ年かけて実施されました。

その結果、縄文上器、弥生時代の集落や墓、古墳時代の集落、古墳、飛鳥時代から室町時代にいたる水田跡等が検出されました。その中でも弥生時代前期の集落遺構と土器群、美園古墳出土の高床式家形埴輪は特に目をみはる成果として注目されています。

今回の美園遺跡の発掘調査は大阪府土木部河川課による「寝屋川南部地下河川・美園立坑築造」工事に伴って実施したもので調査面積は約80m²です。現地表面から約4.5mの深さまで発掘調査を行なった結果、弥生時代前期から中期にかけての堅穴住居、溝、土壙、古代の溝等が発見されました。遺物は弥生時代の壺、甕、鉢等の土器、石包丁、石鎌等の石器、杭等の木器、鹿？の歯、獸骨片、古代の土器破片、獸骨等が出土しました。

今回の調査は小面積ではありましたが弥生時代前期から中期初めにかけての従前の調査成果に比べ遜色のない良好な資料を得ることができました。

調査にあたっては大阪府土木部河川課ならびに大阪府寝屋川水系改修工営所、八尾市教育委員会、その他関係機関の諸氏のご協力をえました。深く感謝の意を表すとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解をお願いする次第です。

平成11年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野 一美

例　　言

1. 本書は寝屋川南部地下河川・美園立坑築造工事に先立って実施した八尾市美園町に所在する美園遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は大阪府土木部の依頼を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課が、主査、泉本知秀を担当者として実施した。
3. 現地調査は平成10年7月から9月まで行い、出土資料等の整理作業は一部現地作業と併行して行い、平成11年3月に終了した。
4. 本書の標高はT. P. (東京湾の標準潮位)で示している。
5. 調査にあたっては八尾市教育委員会、大阪府土木部河川課、大阪府寝屋川水系改修工営所から格別のご配慮をいただいた。記して感謝します。
6. 本概要報告書の執筆・編集は、泉本が行なった。

はじめに

美園遺跡が所在する大阪府八尾市は大阪市の南東部に隣接する位置にあり、北は東大阪市と、南は藤井寺市、柏原市と境界を接し、東側は生駒山地頂上部で奈良県生駒郡平群町と府県境界をなしている。八尾市域の面積は約42平方キロメートルで東側の山間部を除くと市街地となっている。八尾市の人口は（今年1月現在）約27万7千800人で府内で8番目に位置している。

八尾市域では現在80余の遺跡が文化財分布図に登録されており、各時代の遺跡が密集している。山間部にも古墳などがあり市域の大半部が遺跡として把握されている。

八尾市域内では各時代の遺跡が連続として確認されており、先土器時代、縄文時代の遺跡は八尾南遺跡、志紀遺跡、恩智遺跡などそれ数ヶ所ずつ発見されている。弥生時代の遺跡は山賀遺跡、美園遺跡、田井中遺跡等を代表として30ヶ所ほど確認されており、その中で恩智遺跡と跡部遺跡では銅鐸が出土している。古墳と古墳群は10数ヶ所、数百基が確認されており、心合寺山古墳、愛宕塚、高安古墳群等著名なもののが存在している。また同時代の集落遺跡も30ヶ所近く発見されている。古代寺院は渋川寺跡、教興寺跡、勝軍寺跡等12ヶ所確認されている。その他で古代の山城・「高安城」跡の存在は特筆すべきものである。このように八尾市域で発見されている遺跡は河内地域でも、また日本歴史上でも重要な位置を占めるものが数多く認められる。

調査の経過

今回の発掘調査は大阪府土木部河川課が「寝屋川南部地下河川・美園立坑」築造の工事を計画したことに伴い実施することとなった。土層の状況、遺構分布内容ともに1980年代に財團法人大阪文化財センター（当時）が行なった調査（以下、センター調査と記す）結果と酷似している。湧水、崩落を防ぐため、鋼矢板打ち、薬剤注入工事を先行し発掘調査を開始した。

土層は現地表面から約2mは盛土、搅乱土だったため機械で除去した後、人力で掘り下げていった。現地表面の高さは東京湾標準潮位で海拔6.3mである。

センター調査の美園遺跡北端部A地区は現地表が海拔5.3mで約1mの差がある。調査開始直後に南北方向の溝1を確認した。出土遺物から現代溝と判明した。海拔4.0mから3.9mあたりの調査区西端部で溝2を検出した。南北方向に掘られた溝で条里線にのる溝と推定された。



2万5千分の1 調査位置図

現地表面から約2.4m（海拔3.9m）から3.6m（海拔2.7m）までは青灰色粘土層と微砂層の互層である。調査区内では何ら遺物は出土しなかった。この厚さ1.2mにわたる堆積層はセンター調査から推定して弥生時代中期から古墳時代にわたるものと考えられる。水田痕跡、畦の痕跡も認められなかった。

深さ3.6m（海拔2.7m）あたりでやっと遺物が出土し始めた。弥生時代中期初め頃の土器は少量で弥生前期の土器片が多かったが古いものが掘りかえされたりして混入しているものと考えられる。この層を10cm程掘り下げたところで竪穴住居跡が2つ検出された。これを弥生遺構面の第1面とする。弥生時代の遺構はこの下層約40cmの間で更に2面が確認された。竪穴住居跡の第1遺構面は弥生時代中期の初め頃と推定される。その下層の弥生第2遺構面、第3遺構面はいずれも弥生時代前期に属する。弥生第2遺構面では焼土、炭が混入したまっ黒な土が埋まった土壤、住居跡壁溝状小溝等が発見された。弥生第3遺構面では方形周溝状溝、住居跡壁溝状小溝、杭列等が検出された。遺構が確認されたのは現地表面から深さ約4.1m（海拔2.2m）あたりまでであった。更にその下層1m強まで掘り下げたが遺構は発見されなかった。この間にシルト層の間層をはさみながら、3つの黒色粘土層が確認された。この層で今回は土器は出土しなかったが、センターの調査では縄文時代晚期に属することが判明している。

検出された遺構

今回検出された主な遺構は上層で現代の溝1本と古代？の溝1本、下層で弥生時代の竪穴住居跡、土壤、住居跡壁溝状小溝、杭列、方形周溝状溝である。（表1）以下、最下層の弥生時代第3遺構面で検出された遺構から記述し、順次上層に向かって年代の古い順にまとめていくこととした。

弥生第3遺構面（最下層）検出の遺構

この遺構面では南半部で溝3が検出され、北半部で住居跡壁溝状小溝、杭列等が発見された。

溝3 第3、4図 図版1、2 遺物3

調査区の南半部で検出された溝で西端、東端が南に曲がり円形または方形に近い平面形になると思われる。内径または一辺が約7.5mを測る。溝の深さ、幅は表1を参照。溝の埋没土は淡灰青色粘土であり、有機物は混入していない。北東部コーナー付近の溝内で弥生時代前期の甕1個体分が横に倒れた状態で検出された。底部付近の穿孔は認められない。この遺構は方形周

主要遺構	規模（長さ・幅等）	残存深度	検出面	確定年代
溝1	幅200cm～320cm	65cm～150cm	上層1面	現代
溝2	幅350cm以上（5m～6m？）	60cm～100cm	上層2面	古代？
1号住居跡	380cm×280cm？	12cm	弥生第1面	弥生中期前頭
2号住居跡	400cm×400cm	15cm	※	※
土壤1	85cm×50cm	20cm	弥生第2面	弥生中期末
土壤2	60cm×52cm	5cm	※	※
土壤3	45cm×34cm	22cm	※	※
土壤4	400cm以上×80cm	30cm～55cm	※	※
土壤5	170cm以上×100cm？	60cm	※	※
土壤6	160cm×140cm？	31cm	※	※
土壤7	150cm×80cm？	20cm	※	※
土壤8	130cm×80cm？	30cm	※	※
土壤9	300cm×70cm	16cm	※	※
土壤10	80cm×80cm	5cm	※	※
土壤11	65cm×50cm	16cm	※	※
土壤12	50cm×34cm	5cm	※	※
土壤13	120cm×80cm	36cm	※	※
土壤14	74cm×100cm	30cm	※	※
土壤15	200cm×150cm以上	30cm	※	※
土壤16	200cm以上×90cm	30cm	※	※
土壤17	250cm×250cm以上	30cm	※	※
溝3	幅40cm～50cm	10cm～25cm	弥生第3面	弥生中期後半
住居跡-壁溝？	幅10cm～25cm（12cm）	5cm～30cm	※	※
杭列	径5cm程の杭が91本	5cm～20cm	※	※

表1

溝墓の可能性もあり得ると考えられる。この直下の砂層から数点の土器が出土した。

住居跡壁溝状小溝 第4図 図版2

調査区の北西部で住居跡壁溝状小溝が10本余検出された。いずれも幅10cmから20cm、深さも5cmから10cm前後であった。大半は堅穴住居跡の壁溝が部分的に検出されたものと思われる。西端部中央で検出された小溝は丸味をおびており小溝内に深さ20cm前後のピット状くぼみが数個存在する。検出面は海拔約2.2mであった。

杭列等 第4図 図版2

北半部で径5cmから8cmの丸太杭が11本検出された。その中で6本は、東西方向に一列にならんだ状態で確認された。それぞれの間隔は50cmから1mであり等間隔ではない。杭の残存長さは短く5cmから20cmである。先端部はほとんど加工されていなかった。

弥生第2造構面検出の遺構

この遺構面では土壤が17基、住居跡壁溝状小溝数本、小ピット等が検出された。今回の調査ではこの面が遺構、遺物とも一番多い。検出面のレベルは海拔約2.3m前後である。

土壤1 第5図 図版3、5、6 遺物7、10

調査区北東部で検出された梢円形状の土壤である。埋土の上層には明るい黄灰色の細砂が埋められ、中、下層は間に1cmの厚さの細砂をはさんで黒色土が埋まっていた。人為的に埋められたと考えられる。遺物は甕が一個体分と他の甕の破片が出土した。一個体まとまる甕の底部中央に焼成前穿孔した穴が1個あり瓶として使用され外面の上半部には煤が付着している。

土壤2 第5図 図版5

調査区中央部で検出された円形の小土壤で、深さもわずかであったが、炭と焼土がつまっていた。焼土は白色粘土状でごく低温の加熱を受けたものと推定される。この土壤の東側で獸骨の小片が出土した。

土壤3 第5図 図版4、5 遺物9、99

調査区西側で検出された小さな円形土壤で埋土中から壺1個体近くが出土した。南に4個の小さなピットが隣接して確認された。

土壤4 第5図 図版3 遺物13、25、81、111

調査区北東角で検出された長梢円状の土壤で上層には炭、焼土がつまっていた。中層、下層には灰黒色粘土が埋まっており、壺、甕の破片が10数点出土した。

土壤5 第5図 図版3 遺物17、66、85

土壤4に接して検出された土壤で平面は円形に近い。草状の植物を燃やしたような状態の炭が混じった黒色土で埋まっており、土器片数点が出土した。

土壤6 第5図 図版5 遺物15、53

調査区東側で検出された平面円形の土壤で断面は摺鉢状を呈する。最上層は炭混りの黒色土が埋まっていたが下層には灰青色の砂質粘土がつまっていた。井戸の可能性も考えられるかもしれません。

ない。遺物は土器の細片が数点出土した。

土壤7 第5図 図版5

土壤6の南に接して検出された不整形の土壤で遺物は土器の細片が数点出土している。

土壤8 第5図 図版5 遺物50、98

調査区の南東角近くで検出された平面形楕円状の土壤で埋土の上層は炭混りの黒色土で遺物は土器の小破片が数点出土し、甕の破片1点に文様が認められ弥生前期に属する。

土壤9 第5図 図版5

調査区の南東部で検出された不整形の楕円状土壤で埋土は黒色を呈する砂質土で土器の小破片が数点出土した。

土壤10 第5図 図版5

調査区中央付近で検出された小土壤で埋土は黒色土であった。遺物は認められなかった。

土壤11・12 第5図 図版5

2つとも調査区中央南寄りで検出された小さな土壤で埋土は炭混りの黒色土で文様のついた上器片は出土しなかった。

土壤13 第5図 図版5

調査区南辺の中央部で検出された楕円状の土壤。埋土は炭混りの黒色土であった。

土壤14 第5図 図版5

調査区北東部で検出された土壤で土壤4、土壤5によって切られている。平面は楕円形状と推定される。甕の大きな破片が出土した。口縁部に刻み目文様があり前期に属する。

土壤15 第5図 遺物4、5、6

調査区の北辺で検出された大きな土壤で平面は方形に近い。埋土は上層が炭混じりの黒色粘土で下層は炭の混じらない黒色粘土である。甕数個体分が出土した。

土壤?16 第5図

調査区の南東角で発見された遺構で両端とも調査区外にのびており溝の可能性も考えられる。埋土は粘り気の多い黒色粘土で遺物は無文の甕半個体分の他に両端が焼けた小さな枝状の木片が数点出土した。

土壤17 第5図

調査区北西部角近くで検出された大きな土壤である。埋土は上層が炭と焼土混じりの黒色粘土で下層は混り気のない黒色粘土であった。遺物もかなりの量出土したが完形に復原できるものはなかった。前期に属する。土壤15とよく似た遺構である。

住居跡壁溝状小溝 第5図 図版5

この弥生第2遺構面でも小溝が3本検出された。竪穴住居跡の痕跡と考えられる。

弥生第1遺構面検出の遺構

この遺構面では竪穴住居跡が2棟切り合った状態で検出された。検出面のレベルは海拔で約

2.6mあたりである。いずれからも完形に復原できる土器は1点も出土していないので正確な年代判定はできないが、埋土内から第II様式の土器の破片が出土しているので中期の初めと推定しておきたい。

1号住居跡 第6図 図版7 遺物79、102、103、110、112、113

調査区西側で検出された竪穴住居で平面形は不整方形で壁溝は断面観察用の西壁断面では確認できたが平面では明確には検出できなかった。この住居跡の西端部は調査区の外になる。住居跡内西寄りの位置で1m×1.2mの範囲で焼土、炭が確認された。焼土の厚さは約3cmである。焼け具合はやや強く断面たちわりの時、掘るとかなり固く感じられた。赤色、茶褐色、白色と場所によって被熱の違いがあるようであった。柱穴状ピットが4個検出されたが柱痕跡は確認できなかった。床面で同時期と考えられる遺物は出土していないが埋土内から弥生時代前期の土器片の他に石鎌、石包丁等が出土した。石鎌の形態、2号住居跡との関係から判断してこの住居跡は弥生中期の初め頃と推定しておきたい。この床面直下から鹿?の歯(図版4)が出土した。

2号住居跡 第6図 図版7 遺物14、49、104、105、114

調査区の中央部で検出された竪穴住居で西半部は1号住居で切られていたが1号住居の床面下で2号住居に伴う焼土、柱穴が検出された。炭、焼土は0.5m×1.1mの範囲で確認された。焼土は白色に近いもので火力、被熱が弱いと判断された。焼土の厚さは2cm～3cmであった。柱穴状ピットは4個検出されたが、ここでも柱痕跡は確認されなかった。この住居跡からも同時代の完形の上器は出土していない。埋土中から約20点の土器の細片が出土した。前期に属するものが大半であるが、49の土器は中期の初めのものでこの住居跡はこの土器の年代のものと考えられる。この埋土内からも石鎌が2個出土している。

上層の造構

弥生時代中期初頭以降の造構、遺物は今回の調査ではほとんど検出されなかった。

溝2 第7図 図版8 遺物100

この溝は調査区の西側で検出された南北方向に人為的に掘削された大溝である。調査区内では東半分が検出された。推定幅は5mから6m近くになると考えられる。条里線にのる溝であろう。出土遺物は弥生土器の細片数点と馬?の脚部骨1片のみで年代は判然としないが、発掘調査の終盤期9月下旬、台風9号、8号豪雨で断面観察用の南壁塀が崩れ落ち、その中から土師器破片が1点採集された。この溝のつくられた時期を示すものかもしれない。

溝1 第7図 図版8 遺物101

この溝は現代の溝である。磁器の破片、瓦の細片等が少量出土している。

出土遺物

遺物はコンテナ箱に詰めこんで8箱分が出土した。90%以上が弥生時代前期の土器片である。その他には石包丁破片1点、石斧破片2点、石鎌7点、サヌカイト製石器数点、サヌカイトの剝片106点、焼上片、杭、木片等が少量出土している。この中でほぼ完形に復原できた土器は10点

程で、いずれも遺構から出土したものである。

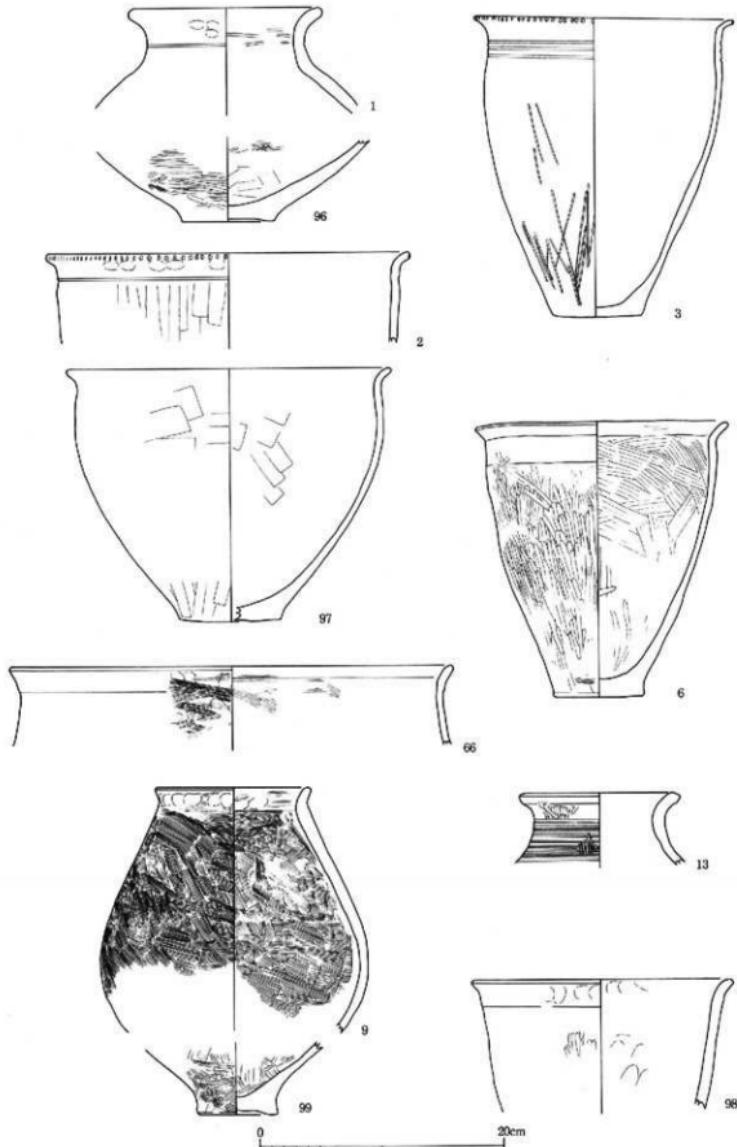
今回の出土遺物で図面または写真で載せたものは118点である。この他に口縁部・文様付破片が100点近く、底部54点が存在するが写真、図面に載せたもの以上の特徴をもつものはほとんどないと思われる。遺構および重要な包含層から出土した遺物については表2に一覧として記す。

今回の出土遺物は少量であるが、弥生前期の土器にはそこそこ見るべきものが存在する。

遺物番号	遺物の出土遺構・包含層
1、2、96、97	弥生第3面直下の砂層
3	溝3
4、5、6	土壌15
7、10	土壌1
9、99	土壌3
13、25、81、111	土壌4
15、53	土壌6
17、66、85	土壌5
50、98	土壌8
88、93	土壌17
100	溝2?
101	溝1
39	1号住居直下の包含層
79、102、103、 110、112、113	1号住居
14、49、104、 105、114	2号住居

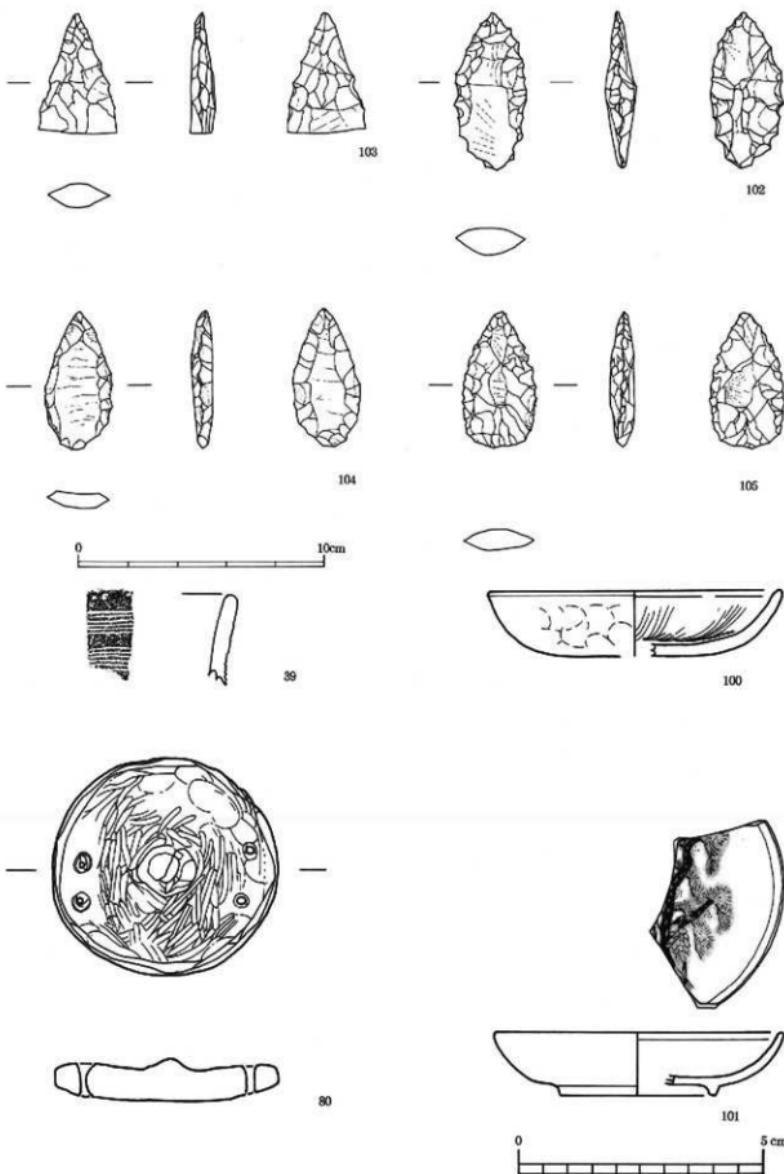
表2

今回の発掘、整理等にあたって次に記す方々の援助をうけた。浅井綱江、東英美子、阿南辰秀、阿部幸一、荒木波子、石神怡、伊藤慎司、井西貴子、井上能子、岩崎二郎、宇沢ヒデ子、江藤豊子、大上馨、大矢ノリ、岡恵子、岡野ゆみ子、奥和之、奥野容子、越智和子、尾上実、亀島重則、河本直子、河本美穂、川東貴子、神吉タエ子、岸田啓子、北村美紀、小門邦代、古下佳代子、阪田育功、佐久間貴士、佐藤洋子、芝野圭之助、白木かおり、大洞真白、高島徹、高田真由美、高野綾子、地村邦夫、辻孝子、出合明、中井貞夫、中沢ミサ子、中辻三沙穂、納谷有香子、西川寿勝、西口陽一、西澤寿子、禰宜田佳男、野崎明美、久富洋子、広瀬雅信、藤丸祐子、二見雅子、戸次かおり、細川眞弓、堀口友里、堀江門也、前田美智子、増川順子、松尾照子、松谷文江、松村隆文、松本有美子、三木弘、森井貞雄、八柄あさ代、矢野早苗、山下美佐子、山田洋子、山本英康、横田明。厚く感謝の意を表します。

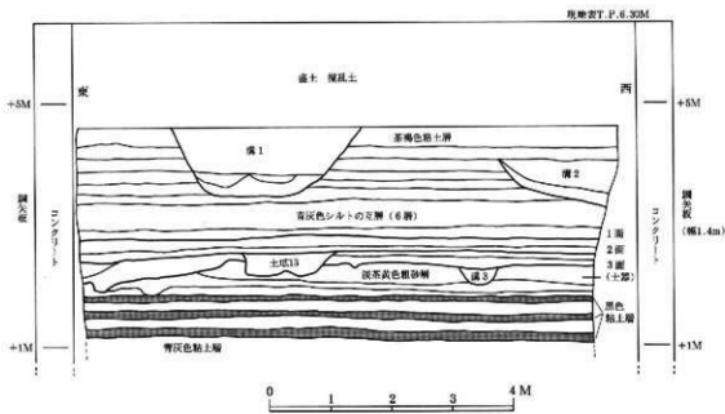


1、2、96、97は第3面直下の砂層、3は溝3、6は土塙15、9、99は土塙3、13は土塙4、66は土塙5、98は土塙8

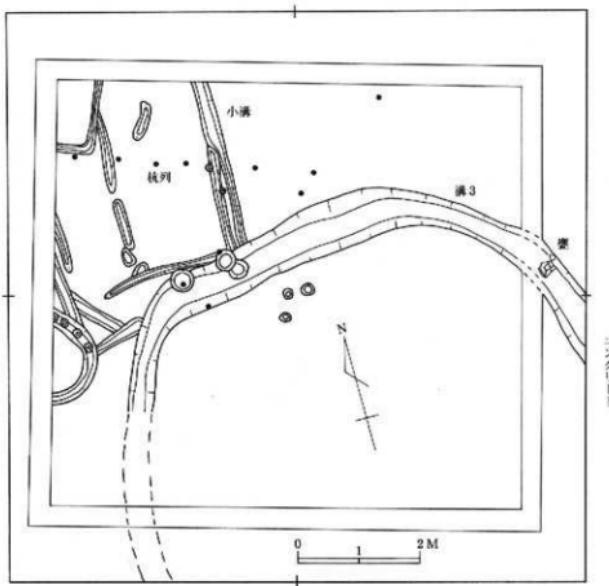
第1図 遺物実測図 S=1/4



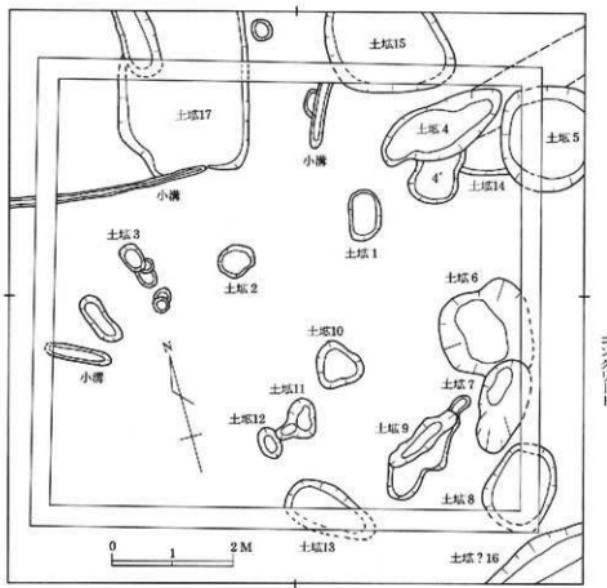
第2図



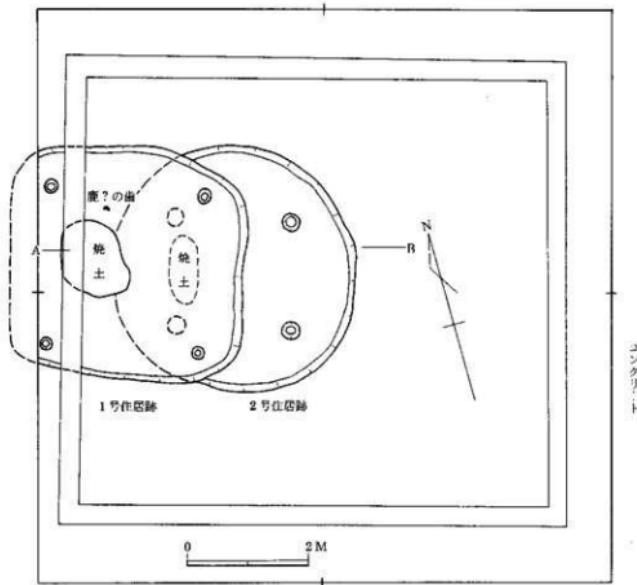
第3図 南壁断面図 S=1/80



第4図 弥生第3遺構面平面図 S=1/80

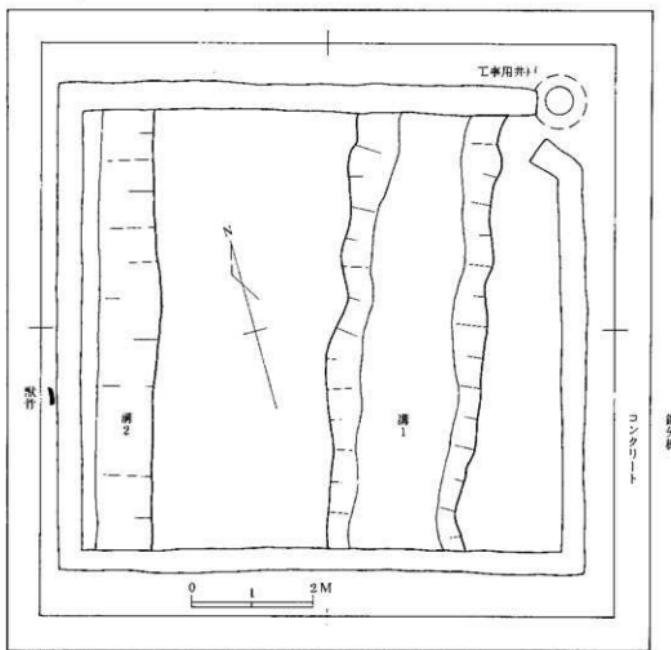


第5図 弥生第2遺構面平面図 S=1/80



A 淡緑色粘土塊混じり砂質上 淡灰黑色砂質上 B T.P. 2.700M
 1号住居跡 (2号住居跡)

第6図 弥生第1遺構面、平・断面図 S=1/80



第7図 上層遺構、溝1、溝2平面図 S=1/80

報告書抄録

ふりがな	みそのいせきはくつちょうさがいよう						
書名	美園遺跡発掘調査概要						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
編著者名	泉本知秀						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06(6941)0351(代表)						
発行年月日	1999年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
美園遺跡	大阪府八尾市 美園3丁目地内	27212	34 38' 17"	135° 35' 47"	1998年7月～ 1998年9月	約80	地下河川立 坑築造
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
美園遺跡	集落跡 水田？	弥生時代 前期～中期 古代	溝、土塁、竪穴住居 条里？溝	土器、石器 獸骨脚部片			

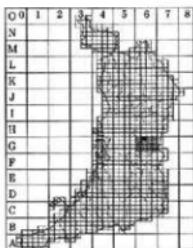


図 版



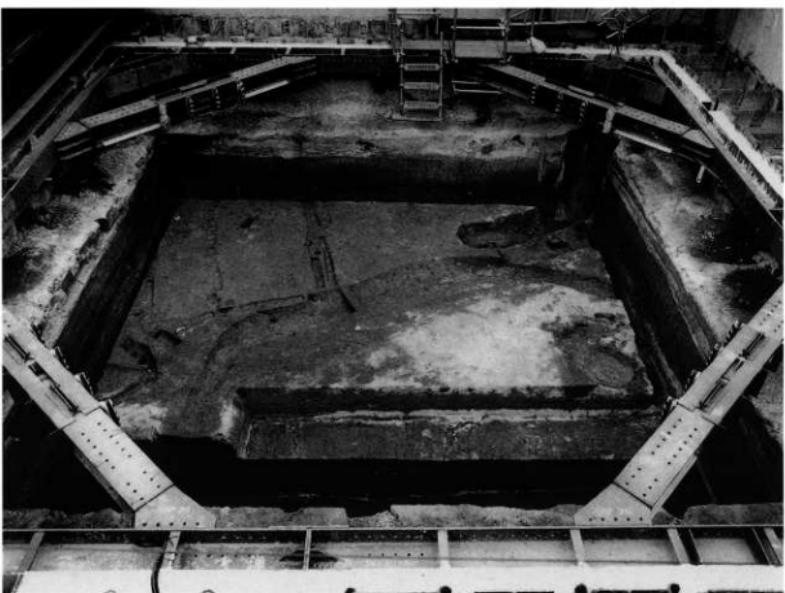
弥生第2、第3遺構面作業風景（北から）



南壁東半断面（北から）



弥生第3遺構面 溝3出土甕（東から）



弥生第3造構面 溝3他（南から）



同上（北から）



弥生第2遺構面 土塙1、4、5他上面（南から）



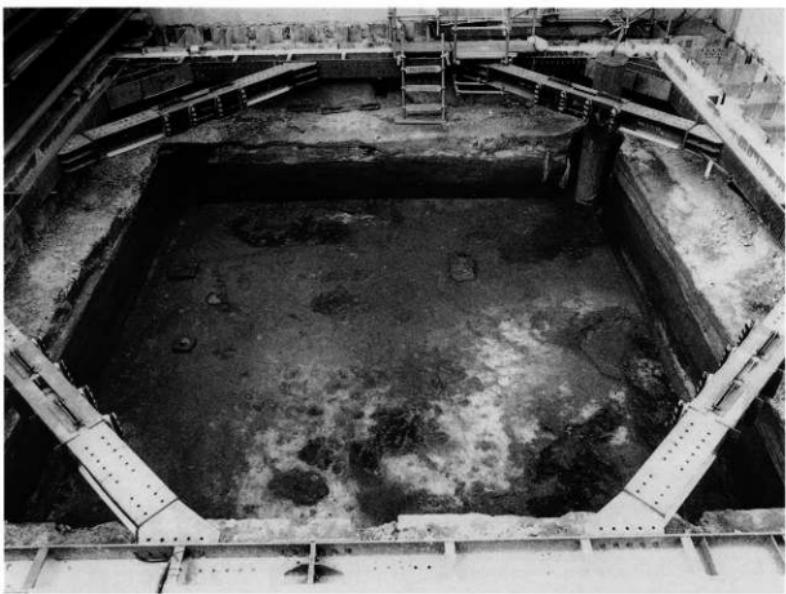
土塙4 他下面（南から）



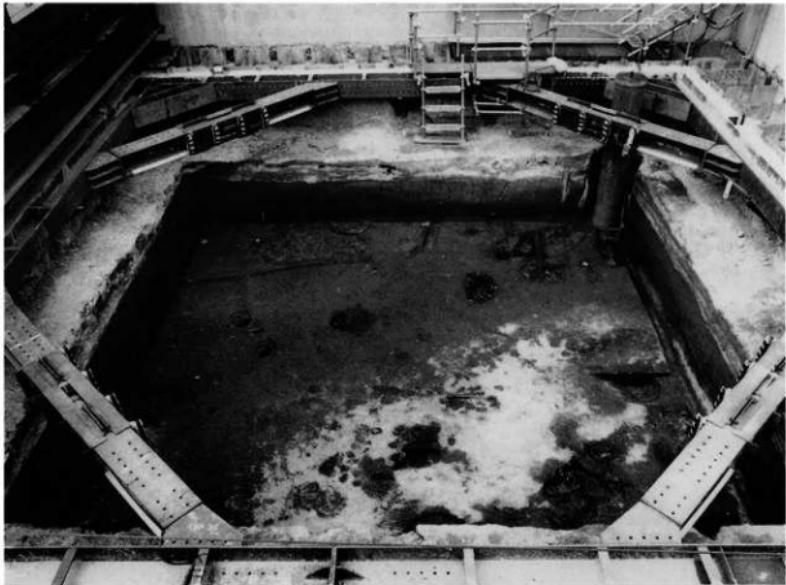
土塙3（東から）



弥生第2遺構面 1号住居面下の鹿？の歯（北から）



弥生第2造構面全景（南から）



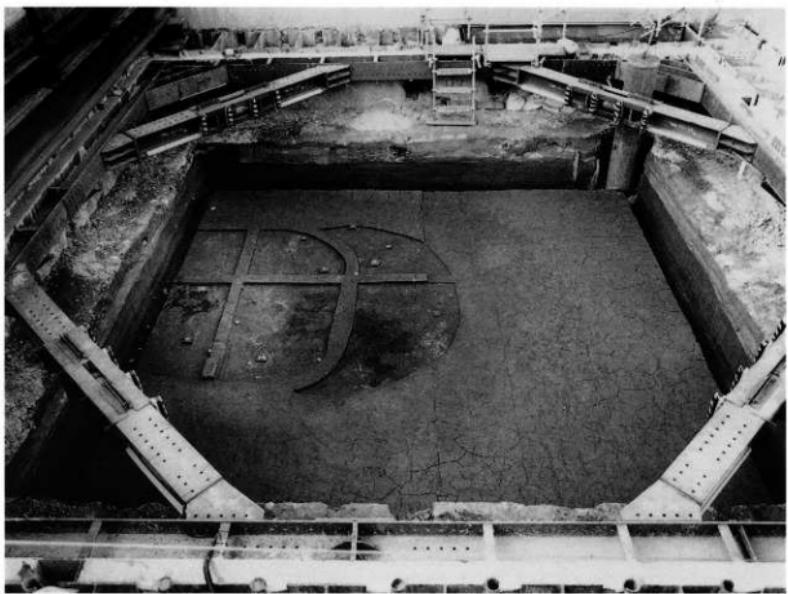
同上（南から）



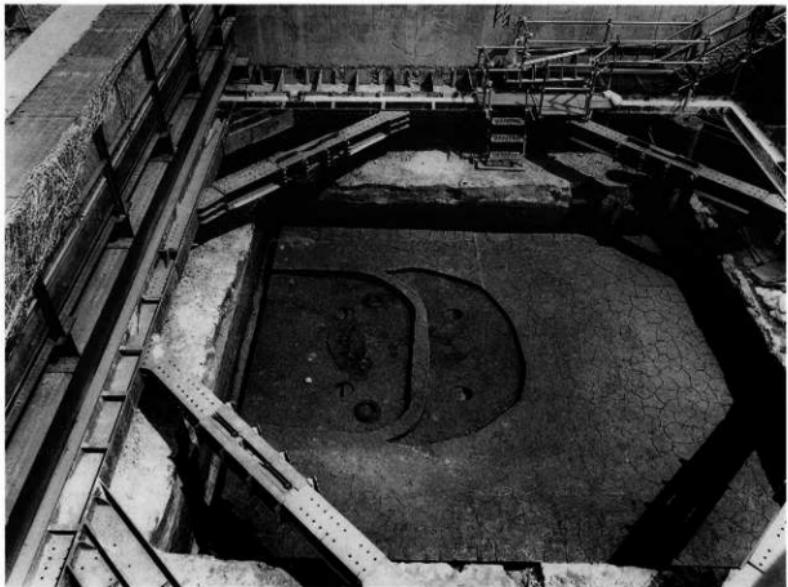
土塚1断面（西から）



土塚土器出土状態（西から）



弥生第1遺構面 1号、2号住居跡（南から）



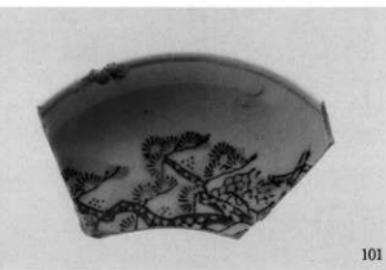
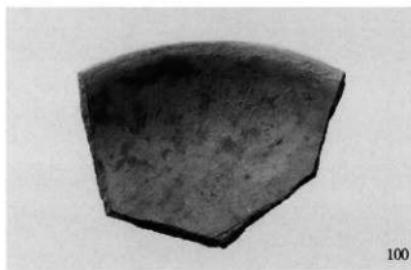
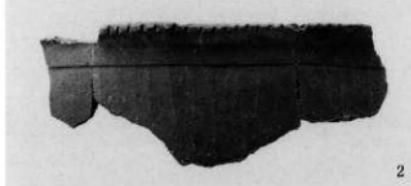
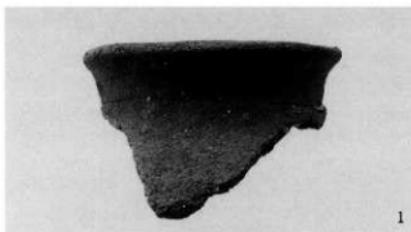
同上（南から）



美園遺跡調査区周辺（南から）



溝1、溝2（南から）



1・2は第3造構面直下の砂層、3は溝3、4・5は土塁15、100は溝2?、101は溝1出土



6



8



9

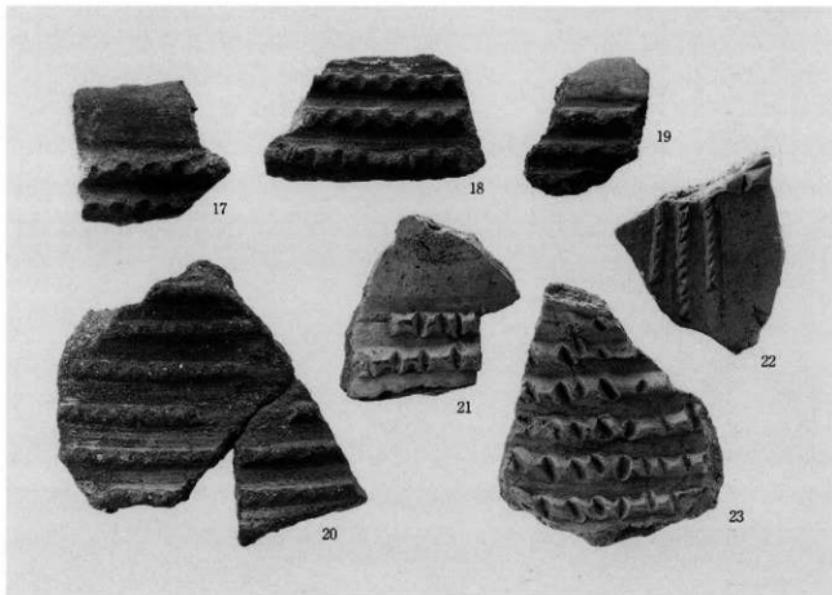
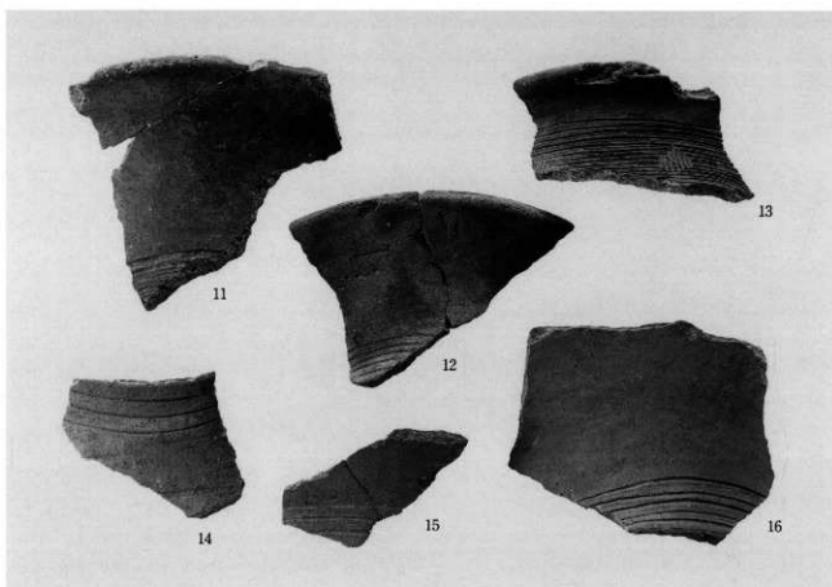


7

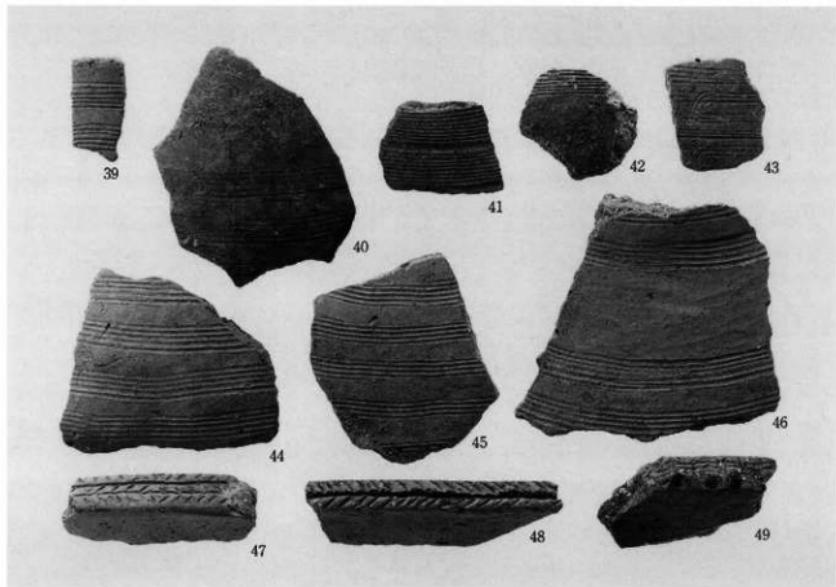
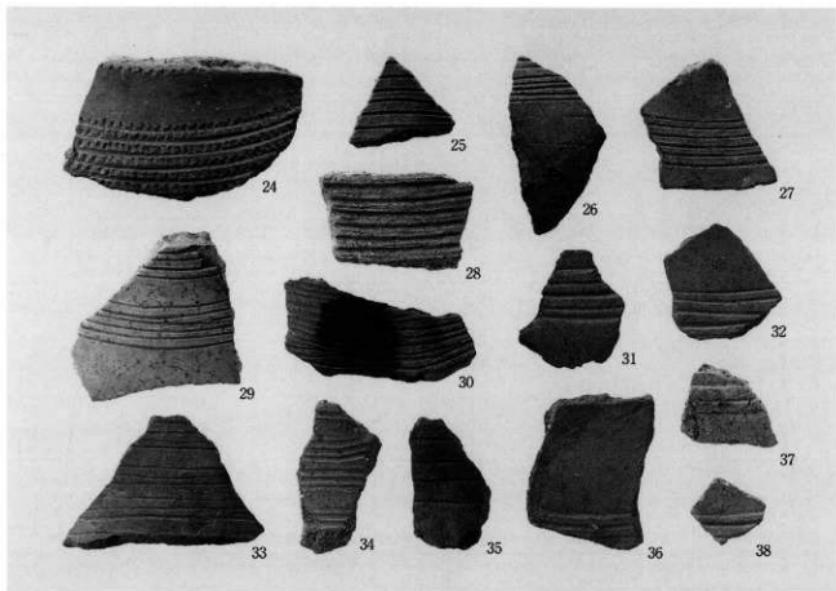


10

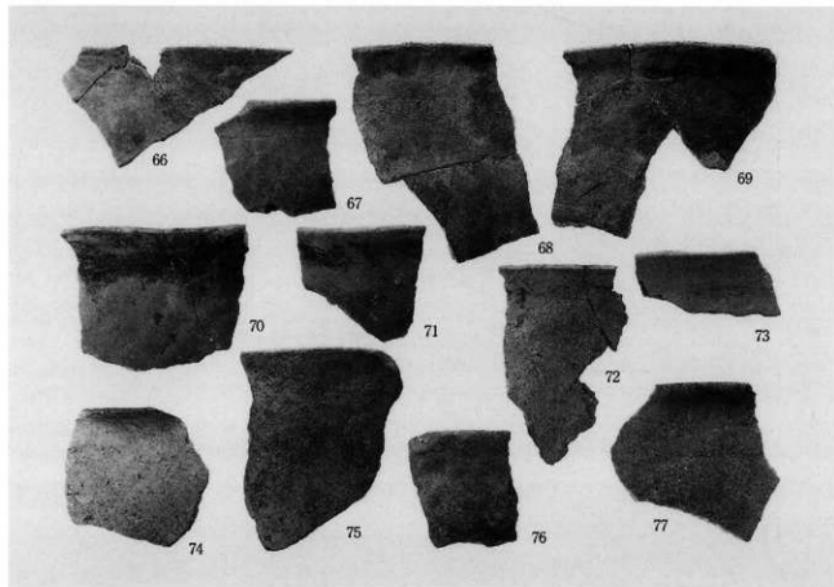
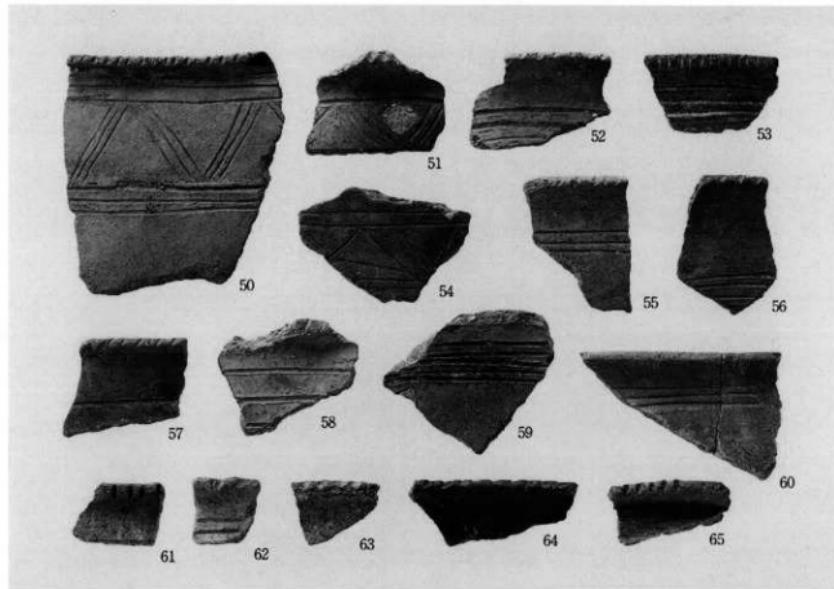
6は土塚15、7・10は土塚1、9は土塚3、8は包含層出土



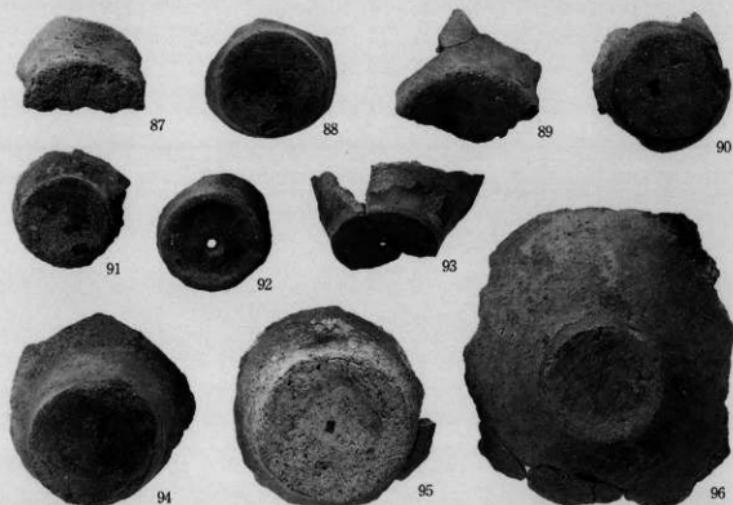
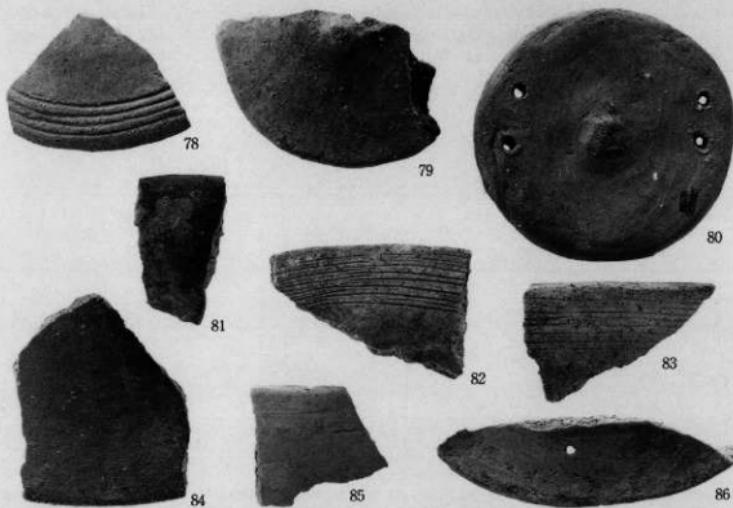
13は土坡4、14は2号住居、15は土坡6、17は土坡5、他は包含層出土



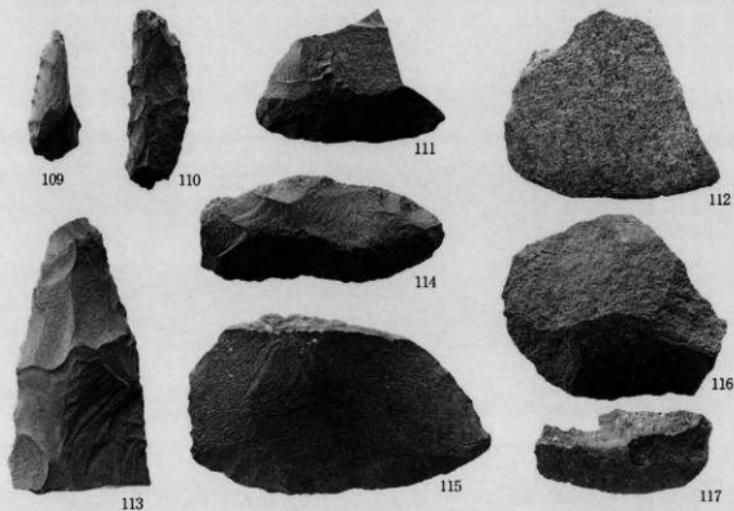
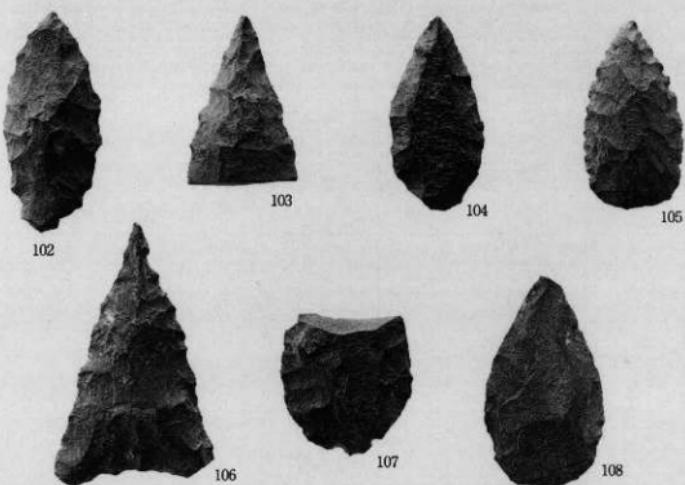
25は土塙4、39は1号住居直下、49は2号住居、他は包含層出土



50は土塙8、53は土塙6、66は土塙5、他は包含層出土



79は1号住居、81は土塙4、85は土塙5、88・93は土塙17、96は第3造構面直下の砂層、他は包含層出土



102・103・110・112・113は1号住居、104・105、114は2号住居、111は土塁4、他は包含層出土

